

表 1 各試薬のピーク面積

薬品	ピーク面積 [$\mu\text{V} \cdot \text{s}$]
ヘキサンプランク	638.0
二硫化炭素 1.27 [μg]	2168.9

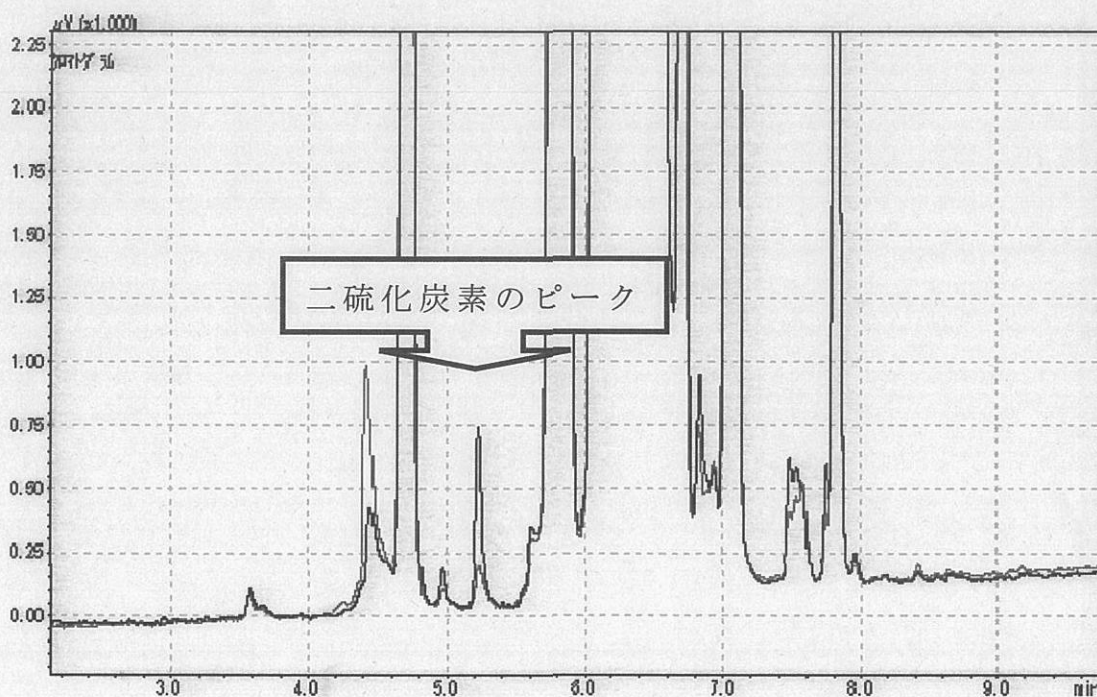


図 2 二硫化炭素 1.27 [μg] (黒) とヘキサンプランク (赤) の比較

2.1.4 考察

二硫化炭素は他の有機溶剤と比較すると FID の感度が非常に悪い。そのため、0.1 [ppm] (サンプル捕集量 0.5 [L] における 0.127 [μg]) まで定量を考えたとき、ブランクと重なってしまうことが今回の結果から分かった。

上記の結果に対して、サンプル捕集量を 5 [L] 以上に増やすことで、0.1 [ppm] に相当するピークでもブランクと重なることなく分析できる。次に、加熱脱着特性の検討では、サンプル捕集量を 5 [L] としたとき、1 [ppm] となるように薬品の調製を 1.27 [mg/mL] に決定した。

2.2 加熱脱着特性の検討

2.2.1 目的